

粉好きの系譜 第 12 回

日本で改良され世界へ

日本列島での広まりにはいろいろと制約を受けた 6 倍体コムギだが、おもしろいことに、今世界で栽培されているコムギの多くが日本の品種をもとに育成されている。このことを知る人は意外と少ない。

近世に入り、魚かすなどの肥料が開発されると、イネもコムギも、養分を吸って背丈がぐんと伸びるようになった。背丈が伸びると刈り取り前に倒れたりして収穫が落ちてしまう。これを防ぐために、背丈を縮めた品種が出回るようになった。背丈を縮めるといっても、木のように剪定するわけにはいかない。背丈を低くする特別な遺伝子持つ品種が見いだされ、それらがどんどん広まっていったのである。

背丈の低い品種が使われたのは日本ばかりではない。イネでは台湾で、オオムギやコムギでは欧州や朝鮮で、それぞれの土地に根ざした品種があった。知られていないものを加えれば、その数はもっと多いかもしれない。

そして日本では、1935 年（昭和 10 年）に岩手県の試験場で「農林 10 号」という品種が育成された。農林 10 号は、背丈の低い「フルーツ達磨」と呼ばれた品種を親にして品種改良されたものであったが、育成直後はあまり注目を集めることもなかったようだ。

農林 10 号が、日の目を見たのは戦後すぐ、米国の専門家の目にとまって本国に持ち帰られてからのことである。これは最初アメリカで、そしてその後メキシコにある「国際トウモロコシ・コムギ研究所」のボーローグ博士らによってその価値を見いだされることになる。1960 年代にはいると、農林 10 号の血を受け継いだ品種がインドやパキスタンなどに広まって飛躍的な増収をもたらした。今では、農林 10 号の血は、世界の人びとの食を支えているともいわれている。

ボーローグ博士らのこの仕事は世界でも高く評価され、1970 年、ついに博士にノーベル賞が与えられることになる。食料の増産に貢献した功績が認められてノーベル賞をもらったという例は他ほかにないだろう。